

6-4			
主題	限られた人数でも質の高いケアを継続するための取り組みについて		
副題	一人一人の生活に向き合う「主役の日」の導入		
キーワード1 個別ケア	キーワード2 業務改善	研究期間	13 ヶ月
法人名	社会福祉法人 老後を幸せにする会		
事業所名	特別養護老人ホーム さつき荘		
発表者：板垣達哉（いたがき たつや）	アドバイザー：なし		
共同研究者：東野隆一（ひがしの りゅういち）			
電 話	03-3703-0581	FAX	03-3703-0583
今回発表の事業所やサービスの紹介	特別養護老人ホームさつき荘は、昭和 51 年に創設。『私達は、全ての高齢者がここに住みたいと思える様な、新しいホームの形を作ります』とビジョンを掲げ、ビジョン達成の基盤となる人材育成に力を注ぎ、入居者にとっての幸せな生活の実現に向けて取り組んでいます。		
《1. 研究前の状況と課題》 特別養護老人ホームさつき荘は、入居者数 50 名で、90 歳以上の入居者が約半数を占めている。医療ニーズの高い方、ベッド上で過ごされる事の多い所謂寝たきりの方、重度認知症の方などが多く、遠足や運動会などのイベントに参加される入居者は比較的元気な方が多いという現状があった。寝たきりの方や重度認知症の方が、楽しみや生きがいをもって施設生活を送る事が出来ているのか、実は生活の質が落ちているのではないか、という話が職員間で生まれた。元気な方は勿論のこと、寝たきりや重度認知症の方も含めた入居者の生活の質の向上を目的とした取り組みを始める事となった。近年、全国で慢性的な介護人材不足が深刻化しており、人材不足の中でも実践可能な方法を模索する事から始まった。		《2. 研究の目的ならびに仮説》 過去の生活記録を参照した結果、寝たきりの方と自立度が高い方では、イベントの参加率に差があった。その差を無くすべく、業務改善を行い、時間を作る事により入居者と関わる時間を増やし、入居者の満足度を向上し、その反応により職員のモチベーションを向上させる。それによりさらに入居者に質の高いケアを提供出来るという好循環を生み出せるのではないかと考えた。	

《3. 具体的な取り組みの内容》

具体的には、一日に一人または二人の入居者に、趣味、おしゃれ、外出など、入居者が希望する活動を行なっていただくという取り組みである。職員が日頃のケア中の会話から入居者の希望を聞いたり、自己表現が難しい方に対しては、生活歴や、過去の日課、習い事などを検証した。入居者にその日一日の主役になってもらいたいと、「主役の日」と名付け、実践していった。主役の日は勿論楽しい事を行なう事でもあるが、入居者と向き合う、そこに至るプロセスを大切にすることである。人材不足の中で実践するには、まずは業務の合間をぬって時間を作る必要がある。方法として、定時の排泄介助を見直し、オムツ交換回数の削減を実施。そうして出来た時間を、個別ケアの時間に充てることとした。半日または終日の外出支援などを行う際は、前の月に事前に計画し、ご家族に交通費や昼食費などの相談を行い、それ用に勤務を組む必要がある。

《4. 取り組みの結果》

（事例1）A様は寝たきりの入居者。胃ろうを増設しており、経管栄養以外の時間は殆どをベッド上で過ごしている。発語もなく、表情の変化も殆どないため、意思表示が非常に困難であった。その方の主役の日に、日光浴を実施し、玄関先の花壇で花を見た際、大粒の涙を流した。これほどの感情の表出を見たのは初めてで、入居者一人一人に向き合う事の大切さを再確認した事例であった。

（事例2）B様は比較的自立度が高いが、消極的で、イベント事には「行きたくない」と参加しない事が殆どであった。主役の日に生まれ育った町に外出する企画を立て実施。外出中はいつもと違い積極的に行動するB様の姿があった。その後、日常生活にもメリハリが付き、イベントにも積極的に参加するようになった。その方の本来の明るい性格を引き出すことが出来た事例である。

《5. 考察、まとめ》

実践を開始して1年が経過し、入居者の生活記録や満足度などを見ると、実践開始前より、質の高いケアを提供出来ていると考えられる。また、職員アンケートでも、入居者との関わりが増え、モチベーションの向上に繋がっているとの意見が多かった。業務改善による職員の負担軽減も大きな成果になっている。以上のことから、様々な好循環を生み出すことに成功したと考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人・ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「回想療法の理論と実際 医療・看護・心理フィールドの心療回想法」

著：小林幹児

福村出版

《8. 提案と発信》

人材不足と業務に追われる中で新たな取り組みを始めるには、相応の覚悟と努力が必要となる。現在行っている業務を見直し、仮説と検証を繰り返し、代替手段などで改善できる箇所を見極める事が、入居者の安全と安心、幸せな暮らしを実現していくために必要なのではないかと考える。